

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1274800109		
法人名	スマイルケア有限会社		
事業所名	グループホームスマイル小見川		
所在地	千葉県香取市野田714番地		
自己評価作成日	平成26年12月 5日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人ヒューマン・ネットワーク		
所在地	千葉県船橋市丸山2-10-15		
訪問調査日	平成26年12月 20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

前年度に引き続き「野田つくし会」での活動は継続しており、地域の皆さん及び小見川地域包括支援センターと連携した活動を続けている。
 今年度の新しい取り組みとしては、野田区自警団の皆さんと連携し、災害時を想定した「防災避難訓練」をおこなった。具体的には、野田区青年館を一時避難場所として、ホームから車イスの入居者を青年館まで避難させる訓練を実施した。自警団17名と区3役、当ホームから職員2名、入居者2名、香取市高齢者福祉課から1名、総勢25名が参加している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

スマイル小見川は香取市野田地区にあり、ボランティアグループ「野田つくし会」と連携して情報発信の勉強会を開催している。本年度は病院長の講演を開催し多数の参加を得た。又地域住民のコミュニケーション発展の為にイベントも開催し60数名の参加を得て年々発展・盛り上がりを見せ施設の認知度もアップしている。施設運営に当たっては理念の「ゆっくり・一緒に・楽しく」を掲げグループホームの特性である利用者に寄り添いゆっくりとした生活を送れる支援に徹して利用者アンケートからも利用者が満足している事を家族が認識していて感謝の回答が多く見られた。職員教育にも力を注ぎコンプライアンスの遵守の徹底や職員の意見尊重によるモチベーションのアップに努めていて職員からのやる気が伝わって来た。本年度地域自警団の協力を得て災害避難訓練を実施する等、地域に根ざした意欲的な姿勢を高く評価したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	スマイルの理念である「ゆっくり・一緒に・楽しく」を前提とし、その有する能力を最大限に引き出せるよう、個人の人生観を大切に捉えている。基本理念を忘れないようにする為に、ホーム内に「ゆっくり・一緒に・楽しく」を掲示してある。	理念の「ゆっくり・一緒に・楽しく」を職員と共有するため廊下に大きく掲げたり、朝礼時復唱する等している。理念の実践のための今年の目標として1日一回はゆっくり寄り添うを掲げていて利用者にゆっくり寄り添う姿勢が見て取れた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	認知症モデル事業の延長である「野田つくし会」の委員として、地域の行事に参加している。連日の買い物は地域の方に周知されている。	地道な地域との交流で利用者のほとんどが地元の方であり、友人・知人の来訪も多くある。買い物にも一緒に行ったり自宅への帰宅支援等して地域とのつながりが途絶えない支援をしている。	勉強会・イベントを「野田つくし会」と共に継続した結果、地域に認知されてきている。次回開催も地域住民のニーズに沿ったものをする事で益々地域密着の施設としての認知度が上がる事を期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	よるず相談窓口の継続や、地域の方々に認知症を分かりやすく理解して頂く為に、認知症モデル事業の延長である「野田つくし会」の活動を通して発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の委員の方は、「野田つくし会」のメンバーでもあり、年間を通して顔を合わせる機会が多い。今年度は、運営推進会議の延長として、野田区自警団と一緒に災害を想定した避難訓練を行った。	運営推進委員は「野田つくし会」の委員と共通して施設運営の為に意見やアイデアを多く頂いている。本年度推進会議での議題の実践として野田地区自警団の協力の下1時間40分かけて利用者を青年館迄避難誘導訓練を行った。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	「香取市地域密着型サービス連絡会」「野田つくし会」の活動を通して、地域包括支援センターや香取市高齢者福祉課と連携している。	「香取市地域密着型サービス連絡会」「野田つくし会」の会議には地域包括支援センターの参加が必ずあり、支援センターを通じて香取市高齢者福祉課に報告があり指導・連絡を取れる関係が構築されている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束を行わないケアを基本としている。全職員が新人研修にて身体拘束防止の研修を受けている。危険予測を立てる事によって、リスクを最小限にできるように考慮した対応を日常化している。	身体拘束防止の研修を新人研修時に受けさせ拘束によるデメリットを認識を理解させている。管理者は個々の事例検討時、皮膚をかきむしる例には長い袖の衣服を着て貰うや軍手の着用等具体的に指導・教育を行い拘束のない支援になるようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内研修にて虐待のメカニズムについて理解を促している。虐待防止を徹底する事を前提とし、問題点があればその都度話し合いをし、改善すべき点があれば周知徹底を図る事としている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見人制度についての提案やアドバイスは市町村との連携を図りつつ行っている。今年度に退去された入居者様が成年後見人制度を利用していた事もあるが、職員の理解はまだ浅く、指導を要する。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	事前にスマイルの支援方法を説明し、理解を頂いてからの契約としている。不安要素も含め、一緒に検討していく事を約束している。様々なトラブルを想定したうえで契約をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	スマイルケアが運営する他グループホームと連携している。毎月、健康面や生活、行動等の変化について文書にてお知らせしている。また、一ヶ月に最低一回は面会に来て頂く事にしており、情報交換の機会にもなっており、運営に反映させている。	利用者の健康・生活の変化等を一か月を振り返って個人毎に家族にお知らせする文章を送っている。又来訪を促して希望・要望を聞き取り運営に活かしている。アンケート結果にも要望を聞き入れ満足している回答も多くみられた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	急病や入院は日常茶飯事であり。人数配置についても、状況に合わせた対応が必要になる。必要な時間帯に人員が配置されるよう職員の意見を反映させている。	管理者は組織運営は入(職員)との認識がありその為教育はもちろんモチベーションの維持には個人個人の都合や要望をくみ取り、働きやすい環境の整備に配慮が行き届いている。面接した職員からも異業種からの参入であるが働き易いとの意見があった。	教育についてマニュアルは整備され採用時に教育をし、毎日の支援の中で気づきがあればその都度指摘している。スキルアップの為に外部研修を年計画で取り入れ新しい技術の習得を期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各目の個性を尊重し、各担当利用者の判断については、管理者と相談の上、担当者が取り決めをしている。また、各職員からの相談や提案等がしやすい環境を作る事により、就業環境の整備を行っていけるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部・内部の段階別に分けた研修会や勉強会を、職員個人のレベルに合わせて行っている。全職員が、同じ目線・同じ力量になる事を目指している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修会や交流会等を通し、同業者と交流する機会を設けている。その後、学んできた事をレポートや会議等で発信し、周知するシステムをとっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の育ってきた環境や背景、家族関係や既往歴等、できる限り情報収集を行った上で、事前に職員が情報を共有するようにしている。職員の最初の仕事は入居者様との信頼関係の構築である事を徹底している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居から入居後まで、常にケアの方向性を家族と一緒に考えている。家族が全てホームに依存する事の無いよう、必ず一緒に考える事としている。また、入居と同時に職員も家族の一員である事を意識していく事を伝えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	他施設や、在宅でのサービスなどの説明を行ない、基本的にスマイルは、本人、家族ともに在宅での生活に限界である方を優先している事を伝えている。在宅でのケア方法についても積極的に伝えている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	スマイルでは、職員も含め入居者様全員が家族である事を前提としており、大家族の中で問題が起きたり、泣いたり笑ったりと、生活の中で全員が主人公である。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族にしかできない事は、いくら職員が専門性を駆使してもできず、その事については家族にも良く理解して頂いている。退去した後も、ご家族が来所されホーム過ごされる事もある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人や家族の希望があれば、知人の訪問や外出も拒む事はない。墓参りや一時帰宅等も、個別に対応している。	友人・知人の来訪を歓迎している。買出し時同行して馴染みの関係構築に寄与する支援をしている。墓参りや一時帰宅の要望も取り入れ関係が途切れない支援を行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者様間では、仲良くしてみたり、喧嘩をしてみたり、仲裁しあってみたり、助け合ってみたりと、それぞれ独自の世界観がある。入居者様一人ひとりが役割をもちながら生活をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	スマイルでは、サービスが終了する時は入院・死亡退去がほとんどあり、全てが終了するまで、家族と協力体制でいる事を基本としている。また、必要に応じてはその後の継続的な付き合いもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	集団生活であり、大まかな日課は決められているが、ひとり一人の状況は毎日変化するものであり無理強いしない方針で対応している。朝礼へ参加することも強制はしない。	入所時家族からの聞き取りを基に日々の関わりの中で気があれば書き置いて情報の蓄積による本人本位の思いや意向を把握して支援に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	スマイルに入居する前に、以前からの生活歴は多方面から聞き取り調査を行っている。また、収集した情報は職員に周知されるよう徹底している。スマイルでは、ケアの開始は、生活歴を知らずに行う事はできない。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日、介護記録への記載を確実にしない、全職員間で情報の共有を行っている。特筆すべき事や改善項目、急な変化については申し送りノートにて周知徹底をし把握を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は、少なくとも年2回は定期見直しをするようにしている。変化等があれば、その都度ヒアリングを行ない見直しをしている。毎月文書にて心身の変化についてお知らせしており、面会時に本人や家族の意向についても聞き取りしている。	年2回のアセスメントを基本としている。毎日の支援の中で変化有る時は「個人ファイル」「介護記録」「生活記録1表」に情報を集め計画の見直しを含め柔軟に対応している。家族アンケートからも介護計画について分かり易いとの回答が多くあり家族と施設の信頼関係が窺えた。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の変化については都度、介護記録に記載すると共に、必要に応じて対応方法の検討や介護計画の見直しにつなげていくよう徹底している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	おおまかな一日のスケジュールはあるが、日々の利用者のニーズに応じていく事が、基本的に当日の仕事の内容となっている。柔軟な姿勢でケアを行なう事で、事業所の多機能化が実現されている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	畑仕事や、美容室、消防署や図書館、様々な資源を活用する事で、地域社会と参画している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的には、本人及びご家族の意向を尊重し、かかりつけ医を変えることはしないが、外来受診が難しくなった方も多くなっており、訪問診療医も受け入れている。今年度は、新たに訪問看護を受入れるようになった。	受診は家族対応が基本であるが、家族が都合つかない場合は通院介助を行っている。お互いに受診結果を報告し、情報を共有している。入所時に訪問看護を利用していた利用者は、そのまま継続利用し、往診も受けている。相談が密にでき、安心感を得ていて柔軟な対応を評価する。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療機関の看護職との関係性の中で、日々の利用者の状態や変化を一番把握しているのはケアスタッフである事の認識をして頂いており、細かな事も受け入れて配慮して頂いている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、	極力入院期間を短くする事は、お互いのメリットである為、病院の都合も受け入れている。その為、病院側も柔軟な対応を示して頂け、急変時の受け入れもスムーズである。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化した場合にホームで出来る事出来ない事を説明している。今年度(10月)は、摂食不良から重度化した方があった。家族・病院と連携し方向性を決める対応を行った。	入所時に、重度化した場合に出来る事、出来ない事は説明している。その上で、重度化した場合は家族、医療関係者、施設が考えを述べ合い検討し方向性を決めている。より家族の意向に沿うよう、連携を密にして支援していることが窺える。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変対応について、全てのスタッフが熟知しているのが理想だが、職員の入替えもあり、全職員ができる訳ではない。研修等を行って行く。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害マニュアルと、防災訓練、避難訓練を行なっている。昨年は野田区自警団とは、緊急災害時の支援体制について「覚書」を取交した。今年度は、具体的に自警団・区3役・ホーム等、総勢25名で、災害を想定した避難くれんを行った。	野田区の自警団と連携が深まり、心強いものとなっていることを評価する。消防署立会いで、火災を想定しての避難訓練を年2回実施している。他に夜間を想定し宿直男性職員2人で、2階の利用者を1階へ降ろす訓練を行い、対応時間を把握した。訓練結果の検証は実施していない。	色々と避難訓練をしているのは良いが、訓練は比較的体調のよい2人くらいを対象に行い、課題の検討が行われていない。折角の訓練が現実の場合に機能するように、問題意識を持って実施し、気づいた課題を検討し合い、全職員が身につくよう期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ホーム全体が家族という考えで対応している。 20代の職員は孫になったつもり、50代の職員は子になったつもりで対応している。声掛けや対応について画一的では無く、職員夫々が自分の言葉で接している。	子や孫になったつもりでも、利用者を傷つける言葉や感情で対応しないように注意している。対応の仕方等で良否を把握した場合は、連絡ノートで知らせ合っている。排泄や入浴時は、他の人の目に触れないように配慮している。みんなの前での連絡は番号で伝える等、細やかな配慮が窺える。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定できる方には、選択肢を用意し、決めて頂く事にしている。自己決定困難な方が多くなってきており、日頃コミュニケーションで思いを読み取る様努力している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者の個々の生活スタイルに合わせてスタッフが支援している。その為に、日々のスケジュールは無く、取り決めもあえて無い。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	スタッフは、個々に好きな色やその人らしい雰囲気を知っている。朝は自分の服を選ぶことから始まり、機能が低下してもその人らしくあるように、一緒に考える。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	ひとり一人の力に合わせ、出来る方には準備や片づけを手伝っていただくようにしている。好みの相違には本人の希望の代替え食をその都度用意している。スタッフは事前に嗜好調査をし把握している。年に数回ではあるが、外食の機会を設けている。	個々の持てる力で、もやしの芽取りやテーブル拭き等、準備や片付けを職員と一緒に食い食事している。個々の嚥下状態に合わせて調理している。外食時にはその場で食べやすく手を加えて、食事が楽しいものとなるように配慮、支援にも一体感が感じ取れる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事形態は、嚥下の状態に合わせて対応し、水分摂取量の確保の為、好みの物を提供しカウントしている。カロリー不足時には、高カロリー代替え食を準備している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行なっている。個々に合わせて、歯ブラシや口腔ケアスポンジ、洗浄剤、湿潤ゼリー等、状況に応じて対応している。定期的に歯科受診をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来る限り、排泄はトイレで行なう事としている。排泄チェック表に基づいて、一人一人の排泄パターンを把握して、適時誘導している。	一日の水分摂取量1.200mlを目標に、摂取量を記録している。排泄チェック表によりトイレ誘導した結果、日中は尿取りパットのみ使用等で紙おむつ代減額につながったケースもある。根気良い自立支援を評価する。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	各利用者の担当スタッフが、排便コントロールを行なっている。下剤の使用についても、排便の記録や食事や水分の摂取量等に配慮しているが、高齢化と共に難しくなっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	隔日の入浴を基本としているが、本人の意思(拒否)やその日の状況に合わせて柔軟に対応するようにしている。	入浴を拒否する場合には、入浴剤や洗い方(強く、やさしく等)の要求に合う職員、また同性の職員が支援する等、個々のその時の要求、状況に合わせた工夫で週3回は入浴するように努力している。臨機応変により、清潔保持支援を行っていることを高く評価する。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間に取り決めはなく、昼寝等時間にとられない支援をしているが、昼夜逆転にならないよう配慮しながら対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	各居室担当が薬の管理をしている。受診担当や往診に対応した職員と情報連携し、疑問等があれば管理者経由で医療機関と連携している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個人記録に生活録や、以前からの趣味、嗜好が分かるようにされている。ホーム内での役割として、食材の準備や食器拭き、洗濯物タミ等、出来る事は行っていたりするようにしている。加齢によるADLの低下は否めず、減少傾向である。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	墓参りや法事、季節に応じたイベントの参加と、天候に合わせた外出支援を行なっている。今年、4月花見、7月外食、10月コスモス見学を行った。天候や体調を考慮しながら、近くのスーパーへ買い物に行く事もある。	園内で職員と野菜作りを一緒にやり、楽しみながら日光浴したり、花見や外食には車で出かけている。不穏な状況には散歩で気分転換を図る等、体調に配慮しながら外出支援に努めていることが窺える。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご自分財布を所持し、金銭管理している方もいるが、管理できない方が多く、スマイル銀行にお金を預けていると思い込んでいる。事務所で管理している方が多い。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	会話をした事を直に忘れてしまう方も居る。家族からの伝言等をメモに書いて渡すこともある。また、携帯電話を持って居る方は、自分でご家族と連携している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	整理整頓については、美化委員を中心にかなり改善されている。大きなカレンダーを配置することで、季節や時間の感覚に配慮している。ベッド上生活の方も、食事の時間はリクライニング車椅子でリビングに出迎えていただき、心地よい刺激で生活のリズムを感じていただくようにしている。各階に2個、温度湿度計を配置した。	朝礼が11時半。個々の椅子の高さや落ち着ける場所が決まっている。スマイル10ヶ条を一人ずつ読み上げる。計算問題を解く。真剣にまた和やかに、雰囲気が良い。職員と合作の季節の作品が飾られ、外出したときの写真が貼られている。室内は温度計、湿度計、加湿器で快適に管理されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファや個別のテーブル等、利用者の用途に応じて配置を変えている。入居者間で問題が発生した場合は、その都度配置換えを行なう等して対応している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	思い入れのある物を持ち込んで頂くことは拒まない。仏壇や遺影が居室に有る事が自然の姿ととらえている。掃除に入った場合でも本人のしつらえを変更したりせず、もとの位置に戻す配慮も忘れないようにしている。	仏壇や遺影、家具を置き、家族の写真等を貼り、自分の居心地の良い部屋になるような工夫が見える。職員は個々の思いを大事にとらえ、掃除等で入室しても終わったら元の位置に戻す配慮を怠らないように配慮していることが窺える。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや居室が分かるように、表札や掲示物が目の高さにある。2Fの入居者様が1Fに降りる際には、必ず職員が見守り介助するようにしている。		